電子署名者 :廣瀬 浩司
DN : cn=廣瀬 浩司, o, ou=筑波大学, email=parergon@jcom.home.ne.jp, c=JP - 日本
日付 : 2012.01.03 01:16:56 +09'00'

制度・出来事・構造

―メルロ―ポンティ制度化概念の射程―

廣　瀬　浩　司

...il doit exister, du mystère à la loi, un lien tel que la loi ne prenne sens que suivant mystère.

J. Paulhan.

§1　序

一九五三年、ジル・ドゥルーズは、ジョルジュ・カンギーレムを責任者とする叢書の一巻として、『本能と制度(*Instincts et institutions*)』という主題でアンソロジーを編み、四ページの序文を付けている。そこで彼は、制度論を法理論と対立させ、法理論が肯定的なもの(le positif)を―たとえば自然法として―社会的なものの外部に措定し、否定的なもの(le négatif)を―たとえば契約による限定として―社会の内部に措定するのに対して、制度の理論は否定的なもの(欲求)を社会の外部に置き、社会的なものを、肯定的で、さまざまな創意(invention)のゆたかな可能性を含んだものとして考える、としている。また制度は、そこで充足される欲求や性向によっては説明されず、欲求の充足はつねに間接的(indirect, oblique)なのであり、社会的なものの内部でのこの間接的な過程を分析することが、制度論の課題となるだろう(1)。

ちょうど同じ頃、一九五四～一九五五年度のコレージュ・ド・フランスにおいては、メルロ―ポンティが、「個人的および公共的歴史における『制度化』」と題して講義を行っている。出版された講義の要旨や、現在パリ国立図書館で参照可能になったメルロ―ポンティ自身の未刊のノートを注意深く読むならば、この概念が、彼の思想の展開の中で一つの結節点を形作っていることは容易にみてとれよ

う。要旨冒頭の概論で、他者論と時間論という現象学の二つの中心問題を軸に、フッサールの構成的分析と世界論に留保を付けていることからもわかるように、ここでめざされているのは、『知覚の現象学』によって確立された現象学的哲学の掘り下げであり、その意味で一九五九年のフッサール論や、彼の未完の著作『見えるものと見えないもの』の間接的存在論へとつながるものを持っている(2)。

だがこの講義を貴重なものとしているのは、むしろ講義の後半部分である。そこにおいてメルロ-ポンティは制度化という「現象」を、その四つの次元（ordres）を渡り歩くことによって記述している。まず第一の次元において、K・ローレンツの動物行動学によって記述された刷り込み（Prägung）の例から出発して、動物〝社会〟における制度化を、本能の間接的な実現として論じていることは、一九五六～一九五七年度から始められる自然の概念についての講義の意味を考える上で興味深い。また第三の次元では、客観以前的・個人的な次元の制度化から、「公共的な」制度化に議論をずらし、純粋に論理的客観的なシステムの制度化を論じ、最後に第四の次元では、リュシアン・フェーブルの歴史論や、レヴィーストロースの記述した親族体系論を題材に、相互主観的な場における歴史的制度化の問題を論じている(3)。

このように広範囲の現象を主題とする制度化概念の射程を考えてみることは、メルロ-ポンティの思想の意味を、それが置かれたコンテクストのなかで、統一的に理解する助けになるに違いない。『見えるものと見えないもの』が、主に身体的・感覚的な次元で議論を進めた部分で中絶してしまったために、前期思想との差違が不明確になってしまったのみならず、好意的にせよ批判的にせよ、思弁的・抽象的なものとして解釈される傾向があるが、制度化概念を媒介とすることによって、この最後の書物を、メルロ-ポンティがコレージュ・ド・フランスで行った他の講義や、『シーニュ』に収められた諸論文で行ったさまざまな象徴的な制度の分析との関連で理解する道も開けるであろう(4)。

われわれが、ドゥルーズとメルロ-ポンティが、50年代の前半において「制度」という言葉のまわりに思考を組織したことから論をおこしたのは、むろん両者の影響関係を指摘するためではない。ただ後者の同時期の著作『弁証法の冒険』を一読すれば容易に気付かれるように、この概念の導入の直接のきっかけのひとつは、サルトル哲学が、「シンボリズム」すなわち「固有の効果（efficacité）を備えた記号の機能」（AD, 208）に対して盲目だったことにあることは指摘されてよいだろう。ドゥルーズのような社会論も、サルトルにとってはクロード・ルフォールやメルロ-ポンテ

ィのそれと同じく「ひそかな有機体論」(5)に帰するであろうが、メルロ-ポンティの指摘するように、人間関係を一定の自立性を持つ記号が媒介していることを即座に有機体論と混同することにこそ、サルトルが『存在と無』で行った、意識と即自存在の概念的区別の限界が露呈している、と考えるべきであろう。メルロ-ポンティの後期思想に、自然の形而上学のみをみる解釈の大部分は、論者の意図にかかわらず、サルトル的批判の焼き直しにすぎない。

このように見るならば、制度化概念導入の背後には、さまざまな象徴的記号体系の分類とその成立根拠への関心があったことは間違いがない。その意味で制度の問題系は、「象徴的なもの」というカテゴリーを前面に押し出し、「象徴的な思考に対して、そして象徴的な思考によって、直接に与えられた総合」(6)を前提とする、レヴィ-ストロースやラカンの構造主義に吸収されたと考えることもできよう。だが、実存主義ないしは現象学から構造主義へ、というフランス思想固有の図式は、この問題が二十世紀思想全体の転換にかかわる問題であり、そしてそれがいまだ未解決であることを覆い隠してしまう危険がある。それを示すため、我々は構造主義のモデルである言語的なシステムの制度化、メルロ-ポンティが講義ノートで「知の制度化」と呼ぶ制度化の過程を、フッサ-ルとソシュ-ルの読解をてがかりに分析していこうと思う。そこで問題になるのは、制度化概念の定義に明示されているように、「経験に持続的な諸次元を付与するような出来事」(RC, 61)を、どのように構造の内部に見極めることができるのか、言い換えれば、出来事と構造とを同時に思考するにはどのようにすればいいのか、ということである。

＊ メルロ-ポンティの著作を引用するに際しては、以下の略号を使用する。

AD: *Les aventures de la dialectique*, Paris, Gallimard, col. 《Idées》, 1955.

EPH: *Eloge de la philosophie*, Paris, Gallimard, 1953.

PM: *La prose du monde*, Paris, Gallimard, 1969.

PP: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.

RC: *Résumés de cours* (Collège de France 1952-1960), Paris, Gallimard, 1968.

S: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

SC: *La structure du comportement*, 8e édition, Paris, PUF, 1977.

VI: *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964.

引用に当っては、邦訳、とりわけ木田元・滝浦静雄両氏のそれを参照したが、文脈の都合上、あらたに訳し直したことをお断りしておく。

B　パリ国立図書館所蔵　未刊手稿。

MS. PPR : *Cours de 1953-1954 : Le problème de la parole.*

MS. IHPP : *Cours de 1954-1955 : L'institution dans l'histoire personnelle et publique.*

MS. HLPH : *Cours de 1959-1960 : Husserl aux limites de la phénoménologie.*

これはメルロ＝ポンティが一九五二年から一九六一までコレージュ・ド・フランスで行った講義のために準備した、彼自身の手書きのノートの一部である。手稿は、大部分A4の白紙に書かれ、多くの場合、各用紙の上端に、講義題名と、ページ数ないしは講義の月日が記されている。一九五二年九月の時点においては、まだ仮整理の段階であり、図書館による公式のレフェランスは付けられていないため、上記の記号のあとに、ページ数など、引用個所を突き止めるための情報を記すことにする。ただし、メルロ＝ポンティが、ノートの一部を全面的に書き替え、旧稿と同じページ番号を付けていることがあり、その場合は、内容から見て推測される順序にしたがい、［I］、［II］の番号を付加した。また、転記が推測による場合は、その単語等に＊を付け、メルロ＝ポンティ自身の欄外の付記は、〈　〉に入れて引用した。

註

(1)　*Instincts et institutions*, textes choisis et présentés par G. Deleuze, col.《textes et documents philosophiques》, Hachette, 1953, VIII-XI.

(2)　未刊ノートの序説にあたる部分で、制度化概念に基づく主体概念の導入によって、世界、他人、行為 (le faire)、時間との関係が変化するとされる (MS.IHPP. p. 2-5)。

(3)　未刊ノートにおける、各次元の題名は次のとおり：1. Institution-Animalité et vie ; Institution d'un sentiment [Proust]. 2. La création artistique comme institution [Panofsky]. 3. Institution d'un savoir. 4. Histoire universelle et institution.

(4)　メルロ＝ポンティの制度化概念に発想を得た、独立の論考としては、C. Lefort et M. Gauchet,《Sur la démocratie : le politique et l'institution du social》, *Textures*, 1971, 2-3 ; C. Castoriadis, *L'institution imaginaire de la société*, Paris, Seuil, 1975 ; M. Richir, *Phénoménologie et institution symbolique*, Grenoble, Jérôme Millon, 1988　などがある。

(5)　J.-P. Sartre,《Réponse à Claude Lefort》, in *Situation VII*, p. 12.

(6)　C. Lévi-Strauss, *Introduction* à M. Mauss, *Sociologie et anthropologie*, Paris, PUF, p. LXVI.

§2　言語の現象学と痕跡の時間

言語的なものの制度化を考えるにあたって、メルロ＝ポン

ティがフッサールの後期思想、とりわけ『幾何学の起源』という題で知られる論考(1)を常に念頭においていたことは間違いないところであろう。そもそも制度化という言葉自体、この論考に頻出するStiftungという用語の翻訳であると言ってもよい(2)。『幾何学の起源』への言及はすでに『知覚の現象学』に見られ、また一九五一年の『言語の現象学について』と題された発表でも、もう少し詳しく解読されているが(S, 120〜121)、『現象学の限界に立つフッサール』と題された一九五九〜一九六〇年度の講義においては、フッサリアーナに採録された版をみずから翻訳しながら、ハイデガー言語論との突き合わせも含め、丁寧なコメントを展開している。この講義の要約や、講義の準備のための彼自身の未刊のノートなどを参照しながら、まず制度化概念がメルロ-ポンティの現象学にとって持つ意味を確定していこうと思う。

周知のとおり、フッサールのこの草稿は、理念的客観性の歴史的な創設過程を分析したものであるが、メルロ-ポンティにとっては、『知覚の現象学』から出発していかに客観的合理性の成立を論じうるか、あるいは、純粋に論理的な世界と身体的・感性的世界の関係がいかなるものであるか、ということを考える上でもっとも貴重な出発点の一つを与えてくれるテクストである。この点に注目しながら、メルロ-ポンティのコメントの持つ特徴的な点を、順次指摘していくことにしよう。

(1) メルロ-ポンティのコメントの第一のポイントは、幾何学的理念の生成が、二重の性格を持っていることを指摘することにある。一方で、幾何学は、首尾一貫したシステムとして理念的統一体を形成しているが、他方で、それは人間の活動によって、創設者(Urstifter)の意識空間の中である日生成したのであり、一定の伝統とさまざまな創意の可能性、つまり開かれた歴史とを備えている。メルロ-ポンティの課題は、非時間的な意味のシステムと、出来事の歴史的系列との両者、—言語学的な言い方をすれば—理念的な共時態と経験的な通時態との両者をともに説明できるような視点を確保することにある。その為には、幾何学的明証が、創設者の意識の中で初めて創設され一種の領野が拓かれた瞬間(Urstiftung)と、それを取り上げ直し(Nachstiftung)、システムの中に統合していく操作(Endstiftung)との間に、「奥行きを持った歴史」あるいは「生成する理念性」ともいうべき第三の次元が拓かれねばならないだろう(RC, 161)。幾何学における意味は、「明白で文字通りの意味」のほかに「ある種の意味の剰余」(RC, 161)を備えており、その創設は意味の地平、「領野(champ)」(RC, 161)

の創設にほかならず、この地平の内部であらたな主題が生み出されたり取り上げ直されたりする、というわけである。

ここまでは、『知覚の現象学』ですでに獲得された、地平の現象学の視点からのフッサール読解である。彼が解決すべき問題は、この「地平としての理念性から、どのようにして〝純粋な〟理念性へと移行するか」(VI, 200)であることは論を俟たない。

この問いに答える準備として、メルロ-ポンティは、フッサリアーナ369ページ36行から370ページ12行までの段落へのコメント(3)で、フッサールの「分析は、二重の運動を備えているように見える」(MS. HLPH, p. 10 bis)と述べ、言語的地平と世界地平ないしは他者との共存の場である人類という地平のあいだに、相互的な基礎付け合いの関係が成立していることを指摘する。すなわち一方で、形相的還元の結果不変項(invariant)として取り出される全体としての言語は、そこにおいて「あらゆるものが名を持つ」(RC, 164; UG, 370)地平として、潜在的に「表現可能なもの」の地平を形成し、この「普遍言語」の共同体によって人類は、開かれた無限の(endlos)地平を確保する、とフッサールは述べている。この第一の観点からすれば、「幾何学者の思考は、言語的な伝統を、遺産として引き継ぐものである」(RC, 164)。他方、フッサールは、この普遍言語それ自体が、反対に「人類という地平に所属する」(UG, 369)とも述べているが、この第二の観点からは、言語は「世界の諸事象(les choses du monde)を〝公共的なもの〟にする」(RC, 164)役割を担うのであって、幾何学はこのいわば言語〝以前〟の地平(こうした表現の妥当性については、次説で論じる)によって、誰にでも妥当しうる可能性、さらには相互主観性を獲得する可能性を保証されていることになる。

メルロ-ポンティはこうして、言語的地平と世界地平が絡み合っている(entrelacé, verflochten)事態に注目しているわけだが、この絡み合いを反省的にほぐさずに主題化することに、メルロ-ポンティの解釈の第一のユニークな点があると言ってよいだろう。フッサールが一見循環論めいた言い方をしているのは、本質を取り出す反省の眼差しを、ある時は言語に向け、またある時は人類という地平に向け、他方を実存論的に取り扱っているからであって、真に主題化すべきものは、本質と事実というどちらの視点からも逃れ去ってしまう事態なのである(4)。

(2) 従って、理念性の立ち現れという出来事を捉えるためには、言語そのものの機能が考え直されなければならない。メルロ-ポンティが強調しているように、主観的な明証性が、意識空間を離れ、現実的ないしは潜在的な他者の誰

にでも妥当する意味として確立するのは、創設者が言語的に語りを行う時、すなわち「機能（Funktion）」（UG, 370）としてのパロールを発するときである。こうした視点で見られたかぎりでの発話行為は、一種の非―客観化的な志向性であり、客観的対象の定立を基礎付けるはたらきを持つ言語である[5]。歴史を創設するこのパロールが発せられるのは、まさに世界地平と言語的地平の交差する地点であり、それだからこそこのパロールは、「いまだ語られたことがらではない」「我々とことがらとの沈黙のふれあい」（VI, 281）を表現する言語として立ち現れるとともに、ある持続性と公共性をもった空間を創設するのである。ここにメルロ―ポンティは、初期以来「語りつつあるパロール」と呼んできた出来事と、ある種の自律性と法則とを備えたシステムとを同時に思考する可能性を見いだしたといってもよいだろう。

(3) 彼はここでフッサールとともに創設者の意識空間へとふたたび遡行し、主観的生成物が客観的理念性を獲得する過程の、時間的構造の分析に着手する：

> すでに意識空間の内部において、自己から自己へのメッセージのようなものがあるのだ。昨日思考した観念と同じ観念を、今日思考しているという確信が得られるのは、昨日の観念の残した痕跡（sillage）が、生産的思考の行う新たな作用によって、ぴったりと覆われるから、または覆われうるからであって、この作用こそが、再想起された思考を、真に完遂するのである。[…]能動的なものの受動的なものへの蚕食（empiétement）があり、また反対に受動的なものの能動的なものへの蚕食がある（RC, 165）。

相互主観的に妥当する客観的意味として基礎づけられる以前に、創設者の意識空間の内部において理念的実在は、再想起によって、反復可能な同一な意味として、創設されることが述べられているわけだが、ここで注目すべきは、メルロ―ポンティが一見フッサールのテクストを忠実になぞりながら、能動的な再想起の行為そのものより、受動性と能動性のあいだの「内的な結び付き」（MS. HLPH, p. 13）、相互的な蚕食関係を重視し、能動と受動との対立そのものに先立つ痕跡の働きを明るみに出そうとしていることである。一次的なものは、能動と受動との「重なり合い（Deckung, recouvrement）」（UG, 370）[6]、のちに彼がキアスムと呼ぶものであり、それこそが、能動的構成作用の隠れた原動力として働きつつ、両者の同時性を実現する。

同様に創設者と他者との間にも、理解と追理解のキアスムが成立し、幾何学的実在の相互主観性を保証する。正確に言うならば、発話者に対して、他者が他者性を備えた対話者として立ち現れるのは、パロールの実践によって開かれるキアスムの場を地としてであって、逆ではない。いずれにせよ、「言語を実際に運用する際に、能動性がそのつど受動性の背面（l'autre côté）であることを、自己が、おのれ自身のうちで経験する」（RC, 165）時に、つまり言語的意識が、自己と自己との差異に直面するときに、理念性は立ち現れるのである。

理念化の過程はここで完結するわけではないが、それには立ち入らず、このキアスムの場を主題化することによって、いかなる帰結が生じるのかを確認しておこう。メルロ-ポンティ自身がフィンクを援用して言っているように、痕跡の働きは言うまでもなく、能動的再活性の可能性そのものを脅かし、現在と過去との間に、意識の作用によっては乗り越えがたい「裂け目（déchirure）」（RC, 167）を開かずにはいない。この働きは文字言語によって引き継がれ、理念的なものの制度化を完成すると同時に、「真が虚の可能性とは別には規定できないこと」（RC, 166）を暴き出すわけであるが、ここからエクリチュールの思想を取り出すことがここでの問題ではない。我々が確認しておきたいのは、能動と受動との時間的なかさなりあいが、すでに言語的なものであること(7)、つまりパロールとは、言語的世界の内部で、意識が自己との差異に直面したときに穿たれる裂け目を、いわば「跨ぎ越す（enjamber）」（S, 30）ことによって、自己と自己、自己と他者、現在と過去とを側面的に結び付ける媒体であるということである。

メルロ-ポンティ自身が制度化概念についての未刊のノートに記しているように、以上に述べた意味において、「時間こそが、制度化のモデルである」(8)。だがここで問題になる時間は、内的時間意識の分析の対象となる時間をはみ出し、「象徴的母体（matrices symboliques）［ラカン］の一つのモデル」（VI, 227）としての時間として了解されねばならない。メルロ-ポンティが追求するのは、象徴的制度の内部への歴史的時間の到来、という出来事であり、この出来事の痕跡を、制度の生成の痕跡として、制度の中に見極めていくことなのである。

＊　＊

こうして我々は、メルロ-ポンティとともに、言語的地平と世界地平の絡み合い、そこにおけるパロールの構成的働き、象徴的母体のモデルとしての時間的なキアスムという三点を確認することができた。メルロ-ポンティがフッサー

ルに対してとる距離は、現象学的反省の本質主義的な側面にかかわり、そのことはやがて、一九五九年のフッサール論、『見えるものと見えないもの』の超反省論や本質論などで、顕在化することになる。

ここでフッサールの試みの〝失敗〟を語るべきであろうか。フッサールの試みの徹底性と、意識の哲学の困難との両方に意識的であったメルロ-ポンティの課題は、意識の哲学を端的に放棄し、語り得ぬ深淵へと埋没する思弁哲学へと回帰することにあるわけではない。フッサールが、意識の「裂け目」として、いわば間接的にしかかいまみることができなかったキアスムの次元を、現象学的反省の厳密性を放棄することなく思考することはできないであろうか、とメルロ-ポンティは問う。もし、フッサールの本質直観の方法が、「肯定的な内容によって与えられないかぎり、なにものも妥当性を持ち得ない」(9)という先入見に基づいているとするならば、制度化という出来事を、後に「肉」とよばれる前客観的領野への「差異の到来（avènement de la différence)」(VI, 270)として、構造論的に思考することが可能ではないだろうか。

こうした視点から、今度は議論を象徴的な構造そのものの記述からはじめ、そこに出来事の痕跡を発見していくため、メルロ-ポンティによるソシュール読解を検討することにしよう。

註

(1) E. Husserl, *Husserliana*, Bd. VI, Haag, 1962, pp. 365-386 [以下、UG]. この草稿については、デリダやリシールの詳しい注釈があるが（J. Derrida, *Introduction* à E. Husserl, *L'origine de la géométrie*, Paris, PUF, 1974 ; M. Richir, 《Commentaire de *L'origine de la géométrie*》 in *La crise du sens de la phénoménologie*, Grenoble, Jérôme Millon, 1990)、本稿はこれらとは独立に論述を行う。またこのテクストにフッサール思想の転回点をみることの妥当性については、野家啓一、「フッサール現象学の臨界」(『無根拠からの出発』勁草書房、一九九三所収)を参照。

(2) 事実、制度化概念についての講義で、この概念を定義した箇所で、この語が使用されている（MS. IHPP, p. 5)。

(3) この講義のための未刊のノートにおける、この個所についてのコメントの題名は、以下の通り。I. Entrelacs (Verflechtung) ; II. Langage et humanité ; III. Langage et être objectif. (MS.HLPH, p.10, 10 bis).

(4) Cf. MS. HLPH, p. 10 bis.

(5) Cf. MS. HLPH, p. 10 bis.

(6) Deckung については、未刊のノートで、次のように記されて

いる。《Deckung = identification d'une Erzeugung et de son sillage—Ni passivité, ni activité simple donc, ni association*, ni survol mais couplage—Cf. évocation du passif comme sensible, Empfindlich par le je peux du corps (Proust)—corps de l'esprit (Valéry)》(MS. HLPH, p. 15).

(7) フッサールについての講義と並行して行われた『自然とロゴス』という題目の講義では、「二つの側面を持つ」身体性の分析によって、人間の身体を、「自然的象徴作用」としてとらえる可能性が、精神分析を援用して語られているが（RC, 177-180）、この視点から『見えるものと見えないもの』のキアスム概念を読み直すことが可能である。この点に関し、我々は別のところで若干の考察を行った。《L'institution de l'oeuvre chez Merleau-Ponty》, in F. Heidsieck (sous la dir. de) : *Merleau-Ponty : Le philosophe et son langage*, Grenoble, 1993, (diffusion Vrin), pp. 153-168.

(8) 参考のため、後続する部分を含めて転記しておく。《—le temps est le modèle même de l'institution〈欄外註 : ce qui est et demande à être / il a à devenir ce qu'il est〉: passivité-activité, il continue, parce qu'il a été institué, il fuse, il ne peut pas cesser d'être, il est total parce qu'il est partiel, il est un champ》. (MS. IHPP, p. 3)

(9) J. Patočka, *Introduction à la phénoménologie de Husserl*, trad. du thèque par E. Abrams, Grenoble, J. Millon, 1992, p. 112.

§3 「隔たり」の言語学と歴史的時間の到来

おそらく一九五三年～一九五四年の講義ですでに詳しく論じたからであろうか、メルロ-ポンティは、制度化概念についての講義ではソシュールを全く論じていない。しかし前者の講義の要約の末尾で、「あらゆるパロールの出生証書としての制度化の本性」を論じる必要性が説かれていること（RC, 41-42）、また、一九五三年の『哲学をたたえて』で、ソシュール言語学が、「個人の制度への、制度の個人への現前」を主題化したことを強調していること（EPH, 74）などから見ても、制度化概念を練り上げるうえでソシュールが念頭に置かれていることは、間違いないと考えられる。

ところで、メルロ-ポンティによるソシュールの『一般言語学講義』の読解が、かならずしも厳密でなかったことはよく知られている。しかしここでの課題は、この読解の正当性を、『講義』ないしは真のソシュール思想とつきあわせることで論じることにあるのではなく、メルロ-ポンティの関心のありかを、前節で問題にした言語の現象学の延長で理解することにある。それと並行して、『見えるものと見えないもの』の本質論（VI, 142-171）なども、適宜参照することになろう。

一九五一年の『言語の現象学について』と題された発表

においてメルローポンティは、「パロールの共時言語学とラングの通時言語学」という区別を、論の出発点においている（S, 107）。これが用語上誤解であることはあきらかなのだが、そのことの指摘よりむしろ、ここで現象学的関心に由来するパロールの問題が、共時態すなわち言語的なシステムの問題と結び付けられていることに、まず注目したい。『世界の散文』のなかの、後に論文化されるときに削除された部分を併せ読むならば、メルローポンティにとって、パロールは、相互主観的なシステムに対立する個人的発話を示すものではなく、むしろ共時言語学こそが、言語的なコミュニケーションの際に使用されるパロールを暴き出す操作として考えられていたことが理解される。ソシュールの功績は、十九世紀の歴史主義的な言語学にさからい、経験的通時態としての言語に一種の還元の操作を加え、「コミュニケーションと言語的共同体」とを可能にする、ある秩序を備えた「全体性」（PM, 33-34）を明るみに出したことにある。従って言語学の課題は、「我々の習慣を転倒させること」によって、「語られた言語の下に、働きつつあるパロール」を暴くことにあるのであり、こうして暴かれたパロールにおいては、「語は、密かな生を生き、それが持つ側面的あるいは間接的な意味の要求するところに従って、結合したり分離したりするのである。たとえ、表現が完成してしまったとたんに、この関係がわれわれには自明なものにみえるにせよ」（PM, 94）。この働きつつあるパロールは、経験的言語に比べるならば沈黙であるが、これこそが経験的言語における記号と意味との結合を可能にする紐帯なのだから、言語と端的に対立するものではなく、いわば「語る沈黙」（S, 58）である。

このように、メルローポンティはソシュールを媒介に、現象学に由来するいわば考古学的な視点と、構造論的な視点とを和解させようとする。では言語システムという制度は、いかにして理念的意味を創設するパロールという出来事をはらみうるのであろうか。さらに、共時態から出発して、いかに歴史的時間を記述しうるのだろうか。これらの問題と、メルローポンティ後期思想において重要な位置を占める「隔たり」（écart）の概念との関係を考察する為に、『間接的言語と沈黙の声』の冒頭を読み直してみることにしよう。

メルローポンティはこの論文の冒頭で、言語が、記号の示差的（diacritique）なシステムをなすこと、そして、記号は、記号間の「隔たり（écart）」としてしか意味を持たないことを、ソシュールから学んだこととして第一に挙げているが（S, 49）、ここで問題になっているのは、箱の中の複数の風船のように純粋に関係的、相互否定的で、相互に排除する

記号のシステムの理念性ではない。たしかに、ソシュール自身が、言語的記号は「概念と聴覚イメージを結び付けるのであり」、「聴覚イメージとは、物質的な音、純粋に物理的な事象ではなく、この音の心的な刻印である」(1)と記すとき、そこにカッシーラーのごとく、形式と資料の結合の理念性と実体に対する関係性の優位性を説くことを特徴とする『シンボル形式の哲学』を正当化するものを見いだすことも可能である(2)。だが少なくとも『知覚の現象学』以来、カッシーラーとの対話の中で哲学を練りあげてきたメルローポンティにとって(3)、記号の示差性という事態は、言語を記号の形式的な相互対立のシステムとして捉えることによって、言語的システムの理念性、客観性を取り出すことへと誘うものではない。彼が「隔たり」という名で主題化しようとしているのは、記号と記号とを側面的に結び付けるとともに、一つの記号とその意味の結合そのものの発生的な根拠であるような、概念的操作に先立つ「密かな生」としてのパロールの操作なのである。その意味で言語システムは、形式的排除の統一体としてよりは、拮抗しながらも「互いに支え合う円天井の構成要素の統一体のような共存の統一体」(S, 50) として理解されなければならない。

この共存の統一体の暴露は、どのように発生の問いと構造の問いとを和解させうるのだろうか。それをメルローポンティは、幼児の最初の音素習得のメカニズムを例に説明している。彼はまず、音素獲得以前の喃語と、獲得された音素対立が、質的に不連続であることを指摘する。その意味では、音素対立は「音声連鎖が、それ自身を倦むことなく切り取り続けること」(S, 51) の結果であり、自律した言語システムの純粋に内的な分節だけが問題になる。にもかかわらず習得という場面において、この「内側からしか開かない扉」しかないように思われる領域に、幼児が間接的にすべりこむことができ、「相互的な差異分化 (différentiation) の原理を『つかみとり』、同時に、記号の意味をも獲得したように思われる」(S, 50) とするならば、純粋な言語的世界と言語〝以前〟的な世界との臨界に、差異の到来という出来事が主題化されなければならないだろう。言い換えるならば、幼児の始めの言語が、言語的な地平と、〝未分化〟な言語〝以前〟的な地平の絡み合いの場に立ち現れ、幼児の意識に、特定の差異が、構造的な差異として到来する瞬間が、捉えられなければならないだろう。

このように差異の到来として理解されたパロールは、その到来の瞬間において、未分化で前個体的な地平と、構造化された地平との両方に、二重のレフェランスを備えている。差異は、ある特定の出来事としてのパロールの意味でもあると同時に、それが到来した瞬間に、ある共存の体系

の内部に、構造的に取り込まれるのであり、この二重の運動を同時に思考することこそが、メルロ-ポンティの課題なのである。つまり記号がその起源において、レヴェルを異にする地平に二重に登記されるからこそ、言語が純粋にシステムとして内的分節を行うことと、にもかかわらず言葉なき幼児が言語的世界に参入して、システムの原理をつかみとることとの両方を説明しうる場が確保される、ということである。

したがって共時態は、そこにある特定の分節を通じて参入する者が、「自己から自己へのメッセージ」を受け取ることによって、一種の学習を行いうる場を本質的にはらんでいる。注意しておかなければならないが、このことは、理念的なシステムに対して心理学的な「体験」(VI, 235) を持ち出すことを意味しない。メルロ-ポンティが別のところで、古典的心理学の諸カテゴリーは、現代言語学においては説明的価値を持たないことを述べ、言語的世界と情動的世界の質的差異を強調している (RC, 34-36) ことからもわかるように、言語学が反省的に共時的構造を抽出し、それをシステムへと理念化することじたいの有効性は疑われるものではない。彼の示そうとしていることは、この連続的で目的論的な理念化の過程で、ある部分的な分節が、それを統合する「一般性」つまり象徴的な「制度へと移行 (passage)」(AD, 323) するときに、一種のゆらぎの時—空間が現れるということである。つまり、部分と全体が循環するこの「問いかけ」(PM, 178) をはらんだ場においてのみ、意識は差異に、構造的差異としてたちあい、新たな意味を言語の意味として学びうるのである。

したがって、相互排除的なシステムとしての言語それじたい、このパロールという出来事の「結果」(S, 56) と考えられなければならない。さらに正確に言えば、理念的なシステムの制度化は、パロールが透明な記号と意味との関係を設立することによって、おのれの働きをみずから隠蔽することにもとづく一種の仮象、遡行的な錯覚であるということなのである(4)。記号間の関係を否定的関係と捉えることも、この仮象の一貫であるが、あえて否定と呼ぶとしても、意識の無化作用の相関物であるような欠如としての否定ではなく、むしろ過剰な意味と無意味の地平に関係するような「自然的な否定性」(VI, 270) とでもいうべき否定である(5)。これは理念化に先立つ、なにやら神秘的な総合作用を持ち出すものではない。また、諸現象を超時間的・超空間的に支配する概念的意味に対して、自然的な事実や、情念的で非合理的な本質を持ち出すことでもない (Cf. VI, 156, 236)。問題は、構造論的次元を導入することによって、言語的意識の理念化の操作そのものを背面から支える操作

をあばくこと、つまり構成的意識にとっては痕跡としか現前しない差異の到来の場を、言語の自己関係の場として、構造的に理解することなのである。この視点から見たとき、差異としての意味は、分節が到来する以前の次元に根を持ちつつ、それを統合することになる構造にも水平的に関係する、「現象横断的な（transphénoménal）」[6]本質として、理解されなければならないだろう。概念的本質でも個体的事実でもないこのパロールの意味は、諸記号が拮抗しながら共存する統一体を一種の「軸（axe, pivot）」（VI, 273）として支える、ないしは「骨組み（membrure）」（VI, 154）「働きつつある本質」（VI, 158）として理解されるのである。

また、この本質の相関者であるパロールの発話主体自体、言語的構造に対立するものではない。構造を記号の否定的なシステムととらえることは、主体の理念化という操作の働く場を確保することによって、言語学者の操作と言語学の科学性を保証するものではあるが、メルロ-ポンティのパロール概念は、主体が自由な構想力の働きによって構造を否定する、といった議論には無縁であり、そもそも差異が到来するという出来事が生起するのは、発話者ないし聴取者が、言語の内的な分節に身を委ねて、差異の到来の場に立ち会った結果、言語的世界の二重の運動に「渦巻きのように」（S, 51）巻き込まれ、「ことがらがふと言われてしまい、ふと思考されてしまっている」（S, 27）時なのである。従って、能動的な構成的意識というものは、言語の内的分節が産み出す「隔たりの頂点」（VI, 245）すぎず、それが構成する理念的意味と同様、現象の全体の運動の派生体なのである。だから、発話主体、聴取者、両者に共通するコンテクスト、そしてそこで伝達されるメッセージといったカテゴリーそのものが、パロールの拓く問いかけの場から出発して、考え直されなければならないであろう[7]。

このように、隔たりの言語学は、あくまで言語の自己関係を分析しながら、その自己と自己との差異の場に、出来事の発生の場を見極める操作として理解される。メルロ-ポンティにとって、発生の問いと構造の問いは矛盾したものではなく、パロールという一つの出来事の二つの側面として考えられているのである。

こうしてメルロ-ポンティは、構造と出来事とを同時に思考しうる次元を、ソシュールの隔たりの言語学のなかに模索する。次に、あくまで言語的世界の内部に生起する出来事としてのパロールの意味が、同時に世界そのものの意味として立ち現れるということ、つまり言語が、「ある種の対象をめざす、オリジナルな様式」（S, 196）として、「なにかを意味し、なにかを語る」（S, 110）能力を備えていること

と、記号の示差性との関係を、解明してみよう。

記号の恣意性に関する、バンヴェニストのソシュール批判を想起するまでもなく、こうした問題の立て方にたいしてはすぐに、精神と世界、言語と現実との関係という哲学的問題を言語学に持ち込むものである、という反論が予想される(8)。だが問題は、システムとしての言語が、あくまで純粋に内的な分節によって超越的な意味を立ち現すこと、「われわれを、おのずから構造のもう一つの側面に、つまりその受肉へと送りこむ」(S, 149) ことにある：

> [言語の]不透明性、その執拗なまでの自己参照(référence)、自己自身への還帰と折り返し、そういったことこそが、言語を、精神的に能力にするのである。なぜなら、言語が今度は一つの世界のようなものとなり、事象それ自身を—言語の意味に変えてから—言語の内部に宿すことができるようになるのである (S, 54)。

このように、メルロ-ポンティにとって、記号体系の側面性は、超越的な意味の到来という出来事と表裏一帯であり、「構造は、ヤヌスのごとく、二つの顔を持っている」(S, 147)。たしかに、構造論者が、内的な規則を持つシステムを打ち立て、それを無限に複雑化していくことによって、システムのシステムを作り上げていくことをさまたげるものはなにもなく、また、象徴的構造が、対象の対象性に対して構成的に働くことはみとめなければならない。にもかかわらず制度は、象徴的なものというカテゴリーには還元されない隔たりの場をつねにはらむのであり、だからこそその隔たりの場において「事象それ自身」が到来すると、言いうるのである。

このことを彼は、別の文脈で次のように述べている。

> それがないとしたら事象や過去の経験が無に帰してしまう (tomber à zéro) ものである隔たりは、事象そのもの、過去そのものへの開在性でもあり、その隔たりが、事象や過去の定義のうちに入り込んでいるのでなくてはならない (VI, 166)。

従って、メルロ-ポンティにとっては、言語システムとその外部の現実との関係が、取り決めによるか、自然的か、といった古典的な問いは問題にならない(9)。なぜならば現実的経験とかシステムとかいった概念が意味を持つのも、パロールの開く場を考慮することからであって、逆ではないからである。いいかえれば、もしパロールがシステムの外部一般への出口を、内側から開いていなかったならば、

言語の内部と外部といった問いそのものが意味を持たないであろう。絵画を「〝沈黙の〟表現様式として現させる」(PM, 157)のも、言語的制度の力によるのであるし、またプルーストについて言われているように、「語ること、あるいは書くこととは、たしかに一つの経験を表現する＝翻訳する(*traduire*)ことではあるが、その経験はそれを呼び起こすパロールによってのみテクストとなるような経験なのである」(RC, 41)。つまり言語的システムが、パロールという出来事を内部にはらむことができる制度であるからこそ、我々は共時的システムを、言語的世界と沈黙の世界との構造的な絡み合いの場と考えることができるのであり、さらにその結合の様態を標定する規準をも獲得することができるのである。

パロールという出来事はしかしながら構造内部の出来事である限り、まったく無秩序なものではない。それはすでに制度化した言語規範からの逸脱として、構造の内部に一種の「一般的歪み」(VI, 159)を引き起こすものではあるが、同時に構造に潜在する規則のシステムを呼び起こすことによって、構造の可能性を実現するのである。

構造＝集合体、システム。だがその原理は、外に分離されてはいず*、スタイルとして、首尾一貫した変形として、ある種の不在としてしか現出しない。

(Structure = ensemble, système, mais dont le principe n'est pas dégagé* et n'apparaît que comme style ou déformation cohérente, comme une certaine absence (MS. PPR, Leçon du 3 et 10 décembre, p. 33).

共時言語学が、言語的制度を差異の体系として記述することは、さまざまな要素を理念化し、それらを階層的な秩序に組み立てることのみにあるのではない。それは言語という制度の内部に、ある不在、ある沈黙としてのみ間接的に立ちあらわれる出来事の痕跡を、世界それ自身のわれわれへの立ち現れの生成の過程として捉えることでもあるのである。言語学を一種の反省と考えるなら、『見えるものと見えないもの』の次の一節はそのまま妥当する：「反省が、世界への信念を宙吊りにするのは、それを見るため、世界が、われわれの世界として生成するために辿った路を、世界の中に読むためなのだ［…］反省は、この前論理的な結合を語るために語を用いるのである」(VI, 61)。こうして言語学的な反省は、沈黙の世界そのものの、ある度合いとスタイルを備えた、構造的な現出の主題化として理解することができるのである。この作業は世界を「見る」ことであ

ると同時に、その現れがすでに言語的構造と関係するがゆえに、世界を「読む」ことでもあり、知覚的であると同時に解釈学的な作業なのである(10)。

＊　＊

同様のことはシステムと世界との関係のみならず、あるシステムとその過去との関係についてもいえる。メルロ＝ポンティはしばしば共時態を瞬間的なものと考えないこと、共時と通時の区別自体疑問なきものではないことを指摘している(11)。このことは言語的構造が二つの顔を持つことと、類比的な事実であるといえよう。自己言及的で示差的なシステムが、それ自体の中に、決定不可能な事象そのものをはらむことができるのと同様、共時的な構造は、一度反省によって括弧に入れられた経験的通時態の真理を最発見するために、過去の表現世界の使い古された「残滓」を、「内的に」(PM, 50) 取り直すことができる。したがって言語的システムの構築の課題は、過去の出来事の痕跡が、過去として現出する領野を開き、現在と過去との内的な接合を実現することにある。「各瞬間における共時的システムは、なまの出来事がすべり込む裂け目をそなえていなければならない」(S, 108)。

共時的システムのなかに立ち現れる時間は、たんなる事実的な過去の時間でも、現在の視点から理念化し、統合しうるような過去でもない、その意味でほとんど無意識的な、「不可能な過去」(VI, 164) であり、つねにすでにある世界の時間として、「神話的過去」(VI, 43) としかいいようのないような時間である。しかし言語的システムを現在と過去のあいだを内的に分節する媒体としてとらえるのなら、言語学は、差異としての過去がシステムに到来するさまざまな様態を、「世界の出来事のリズム（ペギー）」(VI, 249) として聴き、読むことができるのではないだろうか。こう理解された言語的システムは、歴史的時間と自然的時間が側面的に絡み合う場であり、時間は、不可能な過去が結晶化する象徴的母体にほかならないのである(12)。

註

(1) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, éd. critique préparée par Tulio de Mauro, 1972, p. 98.

(2) E. Cassirer, 《Structuralisme in Modern linguistics》, *Word*, 1945, n° 1, p. 114.

(3) Cf. PP, 147-148 ; RC, 130.

(4) この点については、VI, 234-236, 243 ; PM, 12参照。

(5) 否定と差異の区別については、J.-F. Lyotard, *Discours*,

Figure, 4e tirage, Paris, Klincksieck, 1985, p. 75 ; G. Deleuze, *Différence et Répétition*, Paris, PUF, 1968, pp. 262-264. アンリ・マルディネーが指摘しているように、メルロ-ポンティの言語論は、ソシュール言語学よりも、言語的システム内部に含意された時間(le temps impliqué)とその展開の様態を分析する、G・ギョームのそれに近い。Cf. H. Maldiney,《Chair et verbe dans la philosophie de Merleau-Ponty》, in A.-T.Tymieniecka (rédacteur), *Maurice Merleau-Ponty, Le psychique et le corporel*, Paris, Aubier, p. 88,および同じ著者の、*Aîtres de la langue et demeures de la pensée*, Lausanne, Ages d'homme, 1975, pp. 5-30.

(6) この語は、制度化概念についての講義で、別の文脈で使われているのを借用したものである。そこではプルーストの嫉妬の分析を題材に、「愛の現象横断的な現実」が論じられている(MS. IHPP, p. 27)。ここで記述されている事態は、ドゥルーズが、ギョームとともにしばしば援用するG・シモンドンが、「個体化」(individuation)と呼んだものに相当する。Cf. G. Simondon, *L'individuation psychique et collective*, Paris, A ubier, 1989. シモンドンとメルロ-ポンティを統一的に理解しようとする試みとしては、J. Garelli, *Rythmes et mondes*, Grenoble, Jérôme Millon, 1991 所収の諸論文を参照。

(7) Cf. VI, 142, 202.

(8) E. Benveniste,《Nature du signe linguistique》, in *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, col.《Tel》, p. 52. この論文を手がかりにメルロ-ポンティにおける恣意性の問題を論じたものとして、加賀野井秀一、『メルロ-ポンティと言語』世界書院、一九八八、pp. 185 以下がある。

(9) ホイットニーにおいては、言語的制度が、取り決めと自然との古典的対立で思考されていたのに対し、それに発想を受けたソシュールの制度論、とりわけ「ラングを他のすべての諸制度から根本的に区別する」性格としての恣意性の原理においては、この対立が乗り越えられていることについては、C. Normand,《L'arbitraire du signe comme phénomène de déplacement》, *Dialectiques*, n° 1-2, fév. 1974, pp. 109-126 を参照。またデリダも、ソシュールの「制度」という語が、古典的諸対立のシステムの内部で解釈できないことを指摘している。J. Derrida, *De la grammatologie*, Paris, Ed. de Minuit, 1967, p. 68.

(10) Cf. VI, 243. 「解釈学的」の語は、野家前掲論文から借りた。

(11) PM, 34 note ; S, 108.

(12) 歴史的時間と自然的時間との間接的、側面的な関係については『弁証法の冒険』のほかに、S, 154-155 および《La découverte de l'histoire》, in *Les philosophes célèbres*, Paris, Ed. d'art, L. Mazeno, 1956, p. 250 参照(このテクストは、『シーニュ』の『どこにでもあり、どこにもない』には採録されていない)。

§4 結語

このようにメルローポンティにとって、フッサールとソシュールは、制度における構造と出来事との内的な結合を思考するための二つの出発点を提供している。彼自身の制度論は、フッサールの観念論的側面と言語学の科学主義的な側面とを切り落とした地点に、浮き上がることになろう。そのことを検討する過程で、狭い意味での言語と非—言語といった区別自体が有効性を失う過程にも、我々は立ち会ってきた。そこで最後に言語以外をも含めた制度一般について、簡単に考察しておこう。

はじめにも述べたように、制度概念についての講義においては、動物の〝社会〟についての考察から始まりレヴィーストロースの構造人類学におわる広範な次元での制度化が分析されているが、この課題はある意味では、彼が『行動の構造』で物理的、生的、人間的という意味の三秩序を打ち立てていたことと直接に呼応する（SC, 199）。しかしこうした区別自体が階層性を暗黙に前提しかねないことからもわかるように、この書においては、超越論的観念論、すなわち彼が現象学と「同音異義的な関係にある」（SC, 223）とよぶ批判主義的な哲学との区別がまだ不明確であった。たしかにここですでに、批判主義が「同質な、悟性的な活動」としての認識を展開するのにたいして、彼の課題は、形式の到来を「観念の世界における出来事」として、「あらたな弁証法の制度化」として捉えることである、と述べられ（SC, 224）、制度化概念を先取りしているが(1)、ここではほとんど問題提起のみにとどまっている。他方『知覚の現象学』では、もっぱら人間的知覚の次元で議論が進み、象徴的制度化の問題は十分に展開されていない。

制度化概念が提示する四つの次元の制度化の分析は、この観念論的な、等質な階層秩序論への批判として理解される(2)。動物行動学や進化論についての議論を引いて動物の〝社会〟制度が分析され、精神分析を援用して無意識的な人間関係の構造が分析され、さらにはパノフスキーやフランカステルを援用して(3)、美術史における様式が「等価体系」（S, 68）として理解されていることからもわかるように、制度化概念は、〝前言語的〟現象から社会に至る諸制度を構造論的に分析することによって、複数のシステムが、「諸記号の建築物」（S, 52）を、「諸現象の〝段階構造〟（étagement）」、「一連の〝存在の諸水準〟（niveaux）」（VI, 153）を形作っている事態を確認することから出発する。しかしこれらは、たとえ権利上であれ、完全に透明な意味を持つ諸システムのシステムを形成しないのであり、「意味の発生はけっして完結しない」（S, 52）。なぜなら構造一般はその内部に、内

部と外部との境界に、内部の互いに異質なシステムの間に、ミクロなシステムと、それを階層的に統合するシステムとの境界に、世界が現出する場という、「不安定性」と「揺らぎ（fluctuation）」（VI, 284）の要素をはらまざるを得ず、つねに「局地的な状況に結びつけられている」（RC, 65）からである。その意味で、「野生の、なまの存在」は、「常に残り続ける残滓」として、「すべての水準で介入する」（VI, 264）のである。

だから幼児が音素を獲得するとき、言語学者がある未知の言語に対立を発見するとき、レヴィーストロースが未知の神話の構造的対立を発見するとき（S, 151）、彼らがおこなっていることは、未分化にみえるある統一体のなかに差異の到来を「標定（repérage）」（S, 240）すること、―ベルグソンやギュスターヴ・ギョームの言葉を使えば[4]―差異を「見―分けること（discernement）」にある。この差異の見―分けという作業は、やはりベルグソン論で言われているように、つねに「部分的」で「ほとんど経験的」（S, 240）な作業である。差異の到来に立ち会う者は、そのつど「一度も語ったことがないかのように装い」、「耳の聞こえないものが語る者を見るように」（S, 58）見なければならないのであり、だからそうした作業のひとつひとつは、互いに「不連続な」（S, 151）系列をなしている[5]。しかしだからといって、「漠然とした相対主義にこころなぐさめ続ける」（S, 53）ことが問題なのではなく、システム内部の局地的な差異の標定によってそれを統合する潜在的な規則の体系を呼び起こし、象徴的制度が内在させる「真理の生成」（EPH, 78）を実現することが問題なのである。

制度化概念が、サルトル哲学の人間主義的な側面からの訣別と関係していることはすでに述べた。講義の要約の末尾で、この概念は「歴史の形而上学への現象学の展開」（RC, 65）を準備するものであるとされているが、その歴史の形而上学なるものも、個人的な実践という概念に結びつきがちな古典的な意味での歴史哲学より「地理学とすりあわせたほうが作りあげやすい、構造の哲学」（VI, 312）の一貫として展開するものである。だが上に述べたことから分かるように、メルロ-ポンティはサルトル的歴史論から単純に構造論者へと転身したわけではない。たとえばメルロ-ポンティは、レヴィーストロースが象徴的なものに内在する受動的総合を明るみに出したという功績は認めるであろうが、けっして「言語は一挙にしか生まれ得ない。[…] つまり、シニフィアンとシニフィエという二つのカテゴリーは、補完的な二つのブロックとして、同時に連帯しつつ構成された」[6]といった言葉に全面的に同意することはないであろう。たしかにこれは経験的起源への問いを切り捨て、象徴

性の不連続で無根拠な湧出を主題化するのに有益であるが、このように象徴的なものを一種の所与と考え、その権利上の優位を前提とすることは—たとえシニフィアンとシニフィエのあいだには事実上常に「不一致がある」(7)と付け加えられるとしても—制度の内部における不決定な要因としての出来事をあらかじめ理念化・中和化することにほかならない。それに対しメルロ-ポンティの課題は、構造を「歴史的風景」(VI, 312) として記述すること、つまり歴史的時間が、自然的風景に「首尾一貫した変形」を与えつつ、そこに「ほとんど地理学的に登記」(VI, 312) される場として記述することにある。その意味では、彼が『弁証法の冒険』で引き、バルトが「化学的」、デュビーが「生理学的」と呼ぶミシュレの歴史的風景の記述と呼応するものを持っているのである(8)。

また制度化概念は、動物行動学、精神分析、共時言語学、構造人類学といった真に二十世紀的な諸科学とのすりあわせによって、十分な展開をみることになることも先に述べた。このことからもわかるように、制度の概念は、自然と文化、個人と社会、私的なものと公共的なものといった対立をはみだし、それらを横断的・側面的に結び合わす操作的概念であるわけだが、それらの諸学問自体、今述べたように、おのれの革新性をみずから覆い隠しかねないとするならば、それらにたいして批判的まなざしをそそぐだけではなく、メルロ-ポンティが『モースからレヴィ-ストロースまで』で暗示していたように、これら諸学問の内的発展にいわば系譜学的な分析を行うことにより、「社会的なものの創出」(ドンズロー)(9)過程を辿ることが必要ではないだろうか。その意味では、『制度と創設の理論』を一九二五年に書き、カール・シュミットに影響を与え、現在法哲学の分野で新制度学派によって読み直されているモーリス・オーリウーの制度論(10)や、彼に影響を与えたガブリエル・タルドの社会学が、検討し直されなければなるまい。

註

(1) この点についてはすでに加賀野井氏の指摘がある。加賀野井秀一、前掲書、p. 231。

(2) 階層的思考の批判については、S, 228, RC, 136 などを参照。

(3) メルロ-ポンティは、制度化概念についての講義や、『眼と精神』で、パノフスキーの『〈象徴形式〉としての遠近法』に言及しているが、むろんこの論文がカッシーラーの絶大な影響の下に書かれたことに、盲目であったわけではない。制度化概念講義のための未刊のノートでは、パノフスキーを論じた部分でカッシーラーの名を挙げ、パノフスキーが遠近法を、「成熟の到達点

(point de maturité)」「均衡」として考えていることを批判している。(MS. IHPP, p. 36 [II] および p. 38 [I])。同様の批判は、パノフスキーと哲学的前提を共有しているかに見える、P・ブルデューの社会学にも向けうるであろう。P. Bourdieu, *Postface* à E. Panofsky, *Architecture gothique et pensée scolastique*, précédé de *L'abbé Suger de Saint-Denis*, Paris, Ed. de Minuit, 1967。なお、20世紀美術史学における新カント派的な傾向については、G. Didi-Huberman, *Devant l'image*, Paris, Ed. de Minuit, 1989 を参照。

(4) RC, 110, VI, 137. Cf. H. Bergson, *Matière et Mémoire*, in *OEuvres*, éd. A. Robinet, Paris, PUF, 4e éd. p. 188 ; G. Guillaume, 《Discernement et entendement dans les langues》, *Langage et Science du langage*, Paris, Nizet, 1984, pp. 87-98.

(5) Cf. H. Bergson, 《Introduction à la métaphysique》, in *OEuvres*, p. 1416.

(6) C. Lévi-Strauss, *op. cit.*, p. XLVII.

(7) Id. , p. XLIX. 制度論講義のための未刊のノートにおいては、レヴィーストロースは、ゲーゲルとの関係で批判されている (MS.IHPP. Supplément à p.55)。また、VI, 260 および一九五六年五月二六日のレヴィーストロースの発表に対するメルロー=ポンティのコメントも参照。*Bulletin de la Société française de Philosophie*, t. XLVIII, 1956, pp. 119-120.

(8) Cf. AD, 305-306 ; R. Barthes, *Michelet*, Paris, Seuil, col. 《Points》, p. 22 ; G. Duby, *Préface* à J. Michelet, *Tableau de la France*, Olivier Orban, 1987, p. 18. メルロー=ポンティを意識しつつミシュレを読み直す試みとして、M. Richir, *Du sublime en politique*, Paris, Payot, 1952 がある。

(9) J. Donzelot, *L'invention du social* (essai sur le déclin des passions politiques), Paris, Fayard, 1984. また同じ著者の、*La police des familles*, Paris, Ed. de Minuit, 1977 ((の、ドゥルーズのあとがきも参照。法哲学、社会学、精神分析などにおける制度論的発想について総括的にまとめたものとして、René Lourau, *L'analyse institutionnelle*, Paris, Ed. de Minuit, 1970 がある。

(10) Maurice Hauriou, 《La théorie de l'institution et de la fondation (Essai de vitalisme social)》, *Cahiers de la Nouvelle Journée*, 4, 1925, pp. 2-45.

《Institution, événement, structure — la portée de la notion d'institution de Merleau-Ponty》.

Koji HIROSE

Résumé :

Comment établir des relations entre événement et structure ? Cette question, que Merleau-Ponty pose dans son cours au Collège de France (1954-55) consacré à la notion d'instituion, semble se situer au carrefour de tous les thèmes de sa dernière philosophie. Elle a été abordée à travers le phénomène de l'institution linguistique.

Dans son commentaire de 《L'origine de la géométrie》 de Husserl, le philosophe commence par souligner le double mouvement de l'analyse phénoménologique pour faire apparaître l'entrelacement du langage et du monde. La parole qui institue le sens idéal surgit précisément au croisement de ces deux mouvements, en réalisant la jonction latérale du sillage du passé et de sa reprise active. Mais si elle implique en elle-même l'écart temporel qu'elle doit enjamber, ne faut-il pas mettre en évidence l'avènement de la différence à la conscience constituante ?

C'est dans cette perspective que notre auteur cherche dans la linguistique structurale de Saussure le remède aux difficultés de la philosophie de la conscience. Pour Merleau-Ponty, c'est le caractère diacritique du système linguistique qui rend possible l'accès indirect au monde linguistique, puisque la parole dévoile la jonction paradoxale de la singularité de l'événement et de la généralité de la structure symbolique. L'institution linguistique se présente alors comme un lieu où l'on peut repérer l'apparition systématique du monde sauvage et l'avènement du temps historique. Précisément parce que ce repérage est partiel et discontinu, il permet de réaliser le devenir de vérité dans l'architecture de signes.